

部隊であって上下の和睦が十分取れていなかったことに起因するものと思われ残念に思います。

戦後は農事に復し、特にブドウ栽培に力を入れて農家経営を続けました。私も妻と共に元気に老後を楽しんで送っています。

戦争の思い出

愛知県 中野泰男

昭和十二（一九三七）年七月七日、蘆溝橋事件が支那事変の発端となり、日本と中国との戦争は拡大の一端をたどった。そのため村内でも召集令状がきて出征する者が次第に増え、銃後では、出征留守家族慰問、出征家庭の仕事手伝い等で青年団の役員等をしていると、自分の家の仕事などと思うように出来なかった。村内の若者たちは海軍工廠や軍需工場へ行き非常に少なくなったので、青年団の役員は万年役員のようになっていました。事変が大きくなればなるほど銃後も

苦しくなり、万が一にも私に召集令状がくれば、目が悪く（緑内障）仕事もままならぬ父と母、小学生の弟を残して出征しなければならない。家が困るのは目に見えている。警察官にでもなっておけば召集中も給料が頂けるので、そのお金で日雇いでも頼めば父母は助かる。そうすれば私も安心してお国のために御奉公出来る。いっそ思い切って警察官になろうと決心して、豊橋警察署に志願書を提出し受験した。試験には一発で合格した。そして昭和十四年三月一日、愛知県巡査を拝命し名占屋の笹嶋警察署に勤務した。

このことについては家でも親戚でも不満な人がいた。

召集・入隊

昭和十五年十二月十日、「昭和十五年十二月二十日第十八連隊に入隊すべし」という赤紙「召集令状」がきた。

笹嶋警察署派出所管内では大勢集まって送別会をしてくれた。一宮村松原区でも送別会が開かれ、氏神様

から長山駅まで松原の方々が見送ってくださった。男子の本懐これに過ぎるものなし、軍務に精勵し皇国のために尽くし、この御恩の万分の一にも報いると心に銘じた。

豊橋の第十八連隊第五中隊（中隊長、長谷中尉）に無事入隊した。同中隊には五十人入隊したが、一宮出身は私一人であった。

ある日、兵器検査の直前に「兵器標語」を作れと指示があった。私は「兵器は皇国の鉄兜」と書いて提出した。中隊長から「よくできた」と褒められた。直後に廊下や班内の数カ所に、半紙三枚分の紙に墨で大きく書かれて掲示された。掲示されたのは私一人だけだったので、恥ずかしいような嬉しいような複雑な気持ちだった。

大別山作戦

昭和十七年十二月、大別山作戦に参加。一小隊、分隊で敵の軍都である立皇（信陽の東五〇里）の街の直前で、私たち三人が路上斥候として行った。敵兵が

三々五々徒手で散歩している。私たちに拳手の敬礼をする敵兵もいた。皆、突き殺して前進した。後方より「殺すのはやめて、捕獲せよ」と命令が出た。しかし捕らえるのは時間が掛かり、そこから戻らなければならない。私たちは敵兵を見付け次第皆殺しにして前進した。徒手なので殺すのは簡単だった。

羅山光州、固始討伐

羅山の討伐では、町は「全部焼き払え」との命令であった。手分けして焼いたが、木材使用の少ない家屋はなかなか燃えなかった。帰りに山の上から眺めると二、三カ所燃えているだけであった。

この作戦中に残留部隊から「二人の犠牲者が出た」と連絡があった。中隊に帰ると、その犠牲者は豊橋の羽田八幡宮西の佐藤義夫上等兵と当番の安藤上等兵の二人であった。私が当番を続けていれば、死んだのは佐藤と私であった。これは故郷の父母が神仏にお願いして私を助けてくれたと思った。私は故郷の神仏に遙拝し、目に涙がうるんだ。

考えてみれば敵国の中国兵であっても、その人にとって一つしかない命を、何人銃剣で突き殺したのか。小銃で狙撃して当たったことも幾度かあった。戦死か負傷か分らないが、多くの人を殺傷したことは今も私の心に重い負担となっている。赤紙さえこなければ、こんなことにならなかった。戦争とはいえ本当にぎんげの念に堪え難い。

第一線では後方の連絡も取れず、作戦討伐では食糧はほとんど現地徴発（強奪）である。家屋は放火、破壊、家畜は殺し、悪いことばかりして来た。殺さなければ殺される、食べなければ死ぬ、難しい軍隊生活である。昔なれば私は仏門に入り、戦死者の回向すべき人間である。

作戦討伐といえ、すぐ身体が悪くなり病院へ行く戦友もいた。その戦友は殺人もせず、徴発もせず、善良な兵隊さんだ。私は「頭部貫通銃創（破片創）」の時、一カ月あまり、敷き藁の野戦病院へ入院しただけで、作戦討伐に参加しなかったことは一度もない。危険承知で志願、参加したことも幾度かあった。

演芸大会

昭和十八年頃、連隊本部孝感（漢口北約五〇里）、第二大隊本部花園（孝感北約一〇里）に一年くらい駐屯していた。作戦のない時は陽気で楽しい軍隊生活であった。時には演芸大会を催し、各中隊から芝居、歌舞伎などを出して競演した。隊の中には脚本を書く者もあり、演劇に詳しい者もいた。衣装などは漢口、孝感の邦人宅から浴衣、着物などを借り、袴やチョンマゲなどは自分たちのお手製、兵隊の中には器用な者がいた。

脚本に従い練習もした。化粧はアカチン、墨、齒磨粉など。舞台装置も即席でいろいろ工夫をした。準備の全てが野戦そのものだった。それでも各中隊の「出し物」が出ると観衆は満員で、野次が飛び、拍手喝采だった。私も若嫁役で芝居の仲間に入れてもらった。そのような楽しい行事も束の間、次に激しい湘桂作戦が待っていた。

湘桂作戦

中支では日本の大軍が南下し、至る所で激戦が展開されていた。収束と安仁の間まで来て、茶陵の台上に一個分隊の分哨を出した。私はその時分哨であった。五〇センチ程度の塹壕の中にいた。歩哨の交代の時、右横腹を撃たれた。「しまった」と思い横腹の手で撫でてみた。しかし血がついてこない。良かったなあ……本当に良かった。

その時、右手の人差し指の先を負傷した。それが化膿して指先が今も少し短い。歩哨を交代して台上から帰り、上着を脱いで見ると、上着の右腰脇に二つの穴が開いていた。私の小銃と身体の間を敵弾が貫通したのである。本当に危機一髪であった。ああ……また命拾いをしたのである。

日本の南支（華南）軍が順次北上し、逃げ場を失った中国兵は強敵だった。なかでも安仁の戦闘は激しかった。昭和十九年七月二十一日、第七中隊に「安仁城に突入すべし」の命令が下った。安仁は衡州の東約

一〇里で、安仁城の城壁は高さ約一〇メートルのブロック積みであった。真つ先に私の属する一分隊に突撃命令が下った。北門の左側を連隊、大隊の重火器で破壊して、城内に小銃で突撃する戦法である。

十三時、重火器の一斉射撃が始まった。ものの一分もたないうちに重火器の射撃は終わった。水野小隊長は軍刀を抜いて「さあ、行くぞ」と言って、城壁の一〇〇メートルぐらい前の凹地から飛び出した。

安仁城が落ちないので連隊が前進出来ず、連隊長以下何千の将兵が見守る中である。こんなところで躊躇しては恥ずかしい。内心「ああ、ここが俺の墓場」と、小隊長に続いて飛び出した。破壊口にまで着くや否や、右前方から敵の一斉射撃が始まった。途端、私は気を失って倒れた。五分ぐらいして気が付き、周りを見ても小隊長はいない。他に十数人いたのが私の他に一人倒れているだけで誰もいない。すると後方の凹地から「おーい、中野帰れ！帰れ！」と大声で叫んでいる。私は頭を押さえて一目散に後退した。私が戸板に横たわるや、私の周りが戦友でいっぱい

になった。駒形軍医が診察して「中野は時間の問題だ。手当てをしなくてもよい」と言われた。私は頭部貫通、小隊長は大腿部貫通、他にも負傷者が出ていた。一個分隊全滅だなあ……。「中野は目をつぶってはいけない」と言って戦友が手を離さない。私は「こんなことで死ねるのかなあ……」と思っていた。

城壁の破壊口に倒れているのは左高兵長であった。救出を決行したら、さらに犠牲者が出た。暗くなるのを待ってようやく収容した。左高兵長は膝上貫通で幅三センチぐらい骨も肉もなく、日も血だらけの重傷だった。

暗くなって衛生兵が来た。「頭部貫通銃創」の赤札が付いている私を担架に載せて後方に運ぶという。私はこのくらいの負傷なら自分で歩いて行くといい、衛生隊に荷物を持たせて野戦病院まで自分で歩いて行った。

豊吉榮一兵長残酷死

ある作戦で駄馬護衛の警備を行う。急峻な坂道の峠

を越すので、馬がなかなか坂を登れない。坂の下で半日も腰を下ろして大休止、昼寝をして駄馬の行軍するのを待っていた。ようやく行進したので、私たち一個小隊（約五〇人）が続いて前進した。峠より五〇〇～六〇〇メートルの地点に来た時、峠の両側の山頂で我々を待ち構えていた敵軍に一斉射撃をされた。第四分隊の豊吉兵長は腹部貫通、戸板に載せ四人で担ぎ坂道を上り始めたが、坂が急峻で縦には上れない。横に上れば道が狭い。私たちは第三分隊であるが、第四分隊を手伝って上って行く。

敵弾は盛んに飛んで来る。その時、軍医が飛んできて診察し「豊吉兵長は時間の問題だ。躊躇していると他に犠牲者が出るぞ」と言って軍刀を差し出した。誰もまだ生きている兵長を切る者はいない。「何を躊躇しておる」と軍刀を取り、腕を切り、渡してよこした。豊吉兵長を戸板に載せたまま道横の堀に落として、第三・四分隊は道避けて堀（降雨時は川）を駆け上り、峠よりまた堀を駆け降りて駄馬部隊を追跡した。

坂の下で大休止した時に一個分隊歩哨が出ていれば豊吉兵長も戦死しなくて済んだのにと考えた。その峠の激戦地では敵兵の死体も転がっていた。前衛部隊の戦闘は激しかった。峠で暗くなり徹夜で歩いた。翌朝、炊事する時に「腕を火葬」にした。戦争とはいえ、本当に残酷な一夜であった。

豊吉兵長の親元では「うちの榮一は金齒がたくさんあった。金齒の一本ぐらいありそうなものだ。これは榮一の遺骨ではない。生きている、そのうちに帰ってくる」と言っていたそうである。岐阜の郷土の戦友が、そんな話をしてくれた。

戦友の火葬

長沙作戦の時であった。一番激しい戦いで六人の戦友を一度に失った。中国は木材が少ない。六人一度に火葬するにはたくさん薪がいる。よく焼けた人の骨を六人分拾い、半焼きの人はその場に穴を掘り土葬にした。戦死を見届けて誰の遺骨でも来れば幸せである。中国大陸でも遺骨のない戦友が何人もいた。

野戦病院

病院に到着した。見ると、そこは民家の土間である。土間の広さは三間に十間ぐらいである。土間の中央が通路になっており、通路の両側に長藁が敷いてある。病院とは名ばかりの、まことに粗末なものである。隣に寝ている左高兵長は夜になると脚が痛いとき、包帯を解いてくれと執拗に訴える。あまり頼むので可哀相になり包帯を解いてやった。それが衛生兵に見付かりひどく怒られた。しかし、それ以後もあまりに頼むので衛生兵に隠れて度々解いてやった。

敵兵が病院の所在を知り、物品を取り（強奪）に来たことも度々あった。薬品は飛行機で輸送され落下傘で落とされた。時には一つは病院へ、もう一つは敵地へ落ちた。軍医は「薬はないから気力で治せ」と言うのである。病院とは名ばかりの本当に嫌な病院だった。

この病院に入院して二、三日たった頃の夜中のことであった。通路の向こう側に寝ていた第六中隊の邸瀨軍曹が突然立ち上がり「万歳三唱」をしてドサッと倒

れた。近寄ってみると、もう死んでいた。

邸瀬軍曹の枕元には私と同じ「頭部貫通銃創」と赤札が付いてあった。今まで幾度か戦友の死に目にあったが、万歳三唱は初めてだった。私も死ぬ時は、邸瀬軍曹を見習って「万歳三唱をして死ぬのだ」と心に誓った。

その後一週間ぐらい経つと、後方の病院へ移動となった。収果（約一〇里後方）まで一日歩いてようやく到着した。収果の病院についてみると、ここには戸板を並べた寝台があり、前の病院よりは少し良いと思った。包帯交換には毎日来るが、それは軽傷者だけ交換し、重傷者は三日に一回軍医の来る時だけ包帯交換するのである。酷暑の八月で傷口からウジがボロボロ落ち、何とも言えない悪臭が鼻をつき、本当に惨めだった。

私の「頭部貫通銃創」は快方に向かっていった。病院の食事は朝晩二回。「玄米にカボチャを入れたオジャ」を朝晩飯盒の蓋に一杯だけ、腹が減って腹が減ってやりきれない。時には辺りをうろついて、カボチャを

拾ってきて焚き火で焼き、柔らかくなったところで食べた。醬油も味噌もない乞食のような食事であった。

私と一緒にこの病院に後送された米田中隊長はどうかと将校病棟に行ってみると、やはり「玄米とカボチャのオジャ」を食べていた。当番の神谷（第十八連隊出身で岡崎の人）と相談して二人で田圃へ行き、黄色に重く実った稲を刈り取った。脱穀し痩せ馬で粃搗きをしたが、粃がなかなか取れない。ふるいにかけて、ようやく白米一斗ができた。中隊長に話をするると大喜び、早速白いご飯を炊いて三人で食べた。以後お米がなくなれば、また米作りをして「玄米とカボチャのオジャ」とは縁を切った。今度は副食がない。私と神谷は町外れのクリークに目を付け、石灰を運びクリークに散布した。二、三時間経過するとウグイくらいの魚が白い腹を見せ始めた。しかし、日が落ちてだんだん暗くなってきた。魚は十五、十六匹しか獲れなかった。まだ待てば魚は獲れたが諦めて帰ってきた。二人が暗くなっても帰らないので、中隊長は心配して二人は大目玉を食らった。しかし中隊長は内心喜んで

いるようであった。

私の「頭部貫通銃創」は貫通ではなく破片創であった。約一カ月くらい療養して中隊長と一緒に退院した。それから十―十五日かかって中隊に追い付き復帰した。その後、間もなく中隊は五〇〇人くらいで出勤（追及）したが、第七中隊では中隊長と当番と私の三人だけが残った。

私は川の近くで育ち、船も少々こぐことができたので、船を扱う講習を受けた。工兵隊のように軍隊を渡河させる作業である。私一人ではなく第七中隊からも五―六人出た。軍隊が川岸まで行くと「作業要員前へ」と伝達が来る。一般の者は休憩である。要員は船を探し、逐次兵隊を渡河させる。全員が渡河終了まで待機している。終了すると隊に戻り行軍する。まことに割の悪い話である。中でも道県の渡河は本当に苦労した。

柳州攻略

柳州飛行場を攻略した時、飛行場の端で道路（ヤゲンポリ）に兵士が一線に並んで突撃命令を待っていた。その時、「第一分隊の一番軽機責任者と五番小銃責任者が交代せよ」と一番の高垣兵長が五番の私に言った。私は「命令がなくて自分たちだけで交代は出来ない」と言い返した。高垣兵長も言い出したら引かない。次第に二人の声が大きくなり小隊長の耳に入った。「中野、高垣があまり言うから交代せよ」と言われた。私は「上司の命令だ、すぐ交代します」と言って、三人間があるだけで一番と五番がすぐ交代した。その直後二―三分経つか経たないうちに、乱弾が飛んできて五番の高垣兵長の肩から胸へ貫通し、即死した。小隊長をはじめ戦友が「中野は運が良い。もう二―三分頑張っておれば戦死だ」と口々に言ってくれた。私も「本当に運がいい。命拾いをした」と心から神仏に感謝した。

それから柳州に入った。柳州は中支（華中）軍、南支（華南）軍の交流地点であった。

中隊長伝令（当番）

今度は米田中隊長の当番が始まった。柳州から貴陽に向かつて行軍した。毎日毎日、山また山である。食糧はついに無くなり厳しい行軍であった。貴陽の手前七〇里の辺りで反転してきたが米はなく、大豆、小豆、とうもろこし等を食べた。これは常食にならない。みんな下痢してビービーであった。しかも行軍は重い荷物（重装備）を背負って連日続くのである。

柳州で約半年間駐屯していた。米田中隊長は古参の中隊長なので、大隊長不在の時は大隊長代理を務めた。大隊長は当番二人、馬当番一人、食事は専門のコック（兵隊）がいる。当番をするなら大隊長の当番に限る。昭和二十年五月〜六月頃、ニューギニアへ行く噂が立ち、柳州を出発した。

米田中尉は独立大隊を編成して大隊長となり、第七中隊とお別れとなった。私は当番を尾形利三郎兵長に申し送った。時に私は伍長に任官した。柳州から反転して、なんら戦闘もなく南島に到着し、駐屯していた八月十五日、終戦の報を聞く。

捕虜生活

揚子江（長江）沿いに下り鎮江の南岸、金家貧部落で捕虜生活が始まった。兵器を所持しているうちは良かったが、没収された途端、中国兵が物品を強奪に来る。所持品を隠すのに骨がおれた。

その後しばらくして中国兵の使役に出るようになった。私は一度も使役に出なかったが、若い兵隊は交代で出役した。世の中が百八十度転回した。本当に惨めな生活が始まった。復員の話がでるが、なかなか実現しない。一日千秋の思いであった。

復員

昭和二十一年の正月過ぎ、ようやくのこと貨物列車に乗り、上海の旧市庁舎まで来た。上海敵前上陸の戦場が手に取るように見える。その時、敵は陣地を構えて日本軍を待ち構えていた。遮蔽物は何もない。日本軍の望みは友軍の艦砲射撃だけであった。これでは犠牲者の出るのは当然と思った。

上海旧市庁舎に一週間くらい居た。待てば待つほど

食糧の食い延ばしである。ご飯を乾してカビの生えないうようにしなければならない。

待ちに待った船がようやく来た。船はやはり貨物船を改造した大きい船であった。いよいよ乗船、出発。

玄界灘も難なく通過、日本が見えてきた。「日本だ!」。上陸は九州の鹿児島である。二月二十五日頃鹿児島に上陸した。高島屋百貨店ビルに宿泊した。長床むしろが敷いてあり、窓ガラスのないビルであった。しかし、桜島は良く見えた。

三月三日に貨物列車に乗り鹿児島駅を出発、博多駅で旅客列車に乗り換えた。窓ガラスは所々破れており、寒い列車であった。買い出しの人々がいっぱい、復員者は小さくなって乗って来た。豊橋へ到着したのは二十四時頃であった。飯田線の列車は既に無かった。豊橋駅は焼けて昔の面影もなく、側壁だけで屋根もなかった。

駅前の焼野が原を眺めながら、駅舎で居眠りをして飯田線の一番電車を待った。午前七時頃、ようやく懐かしい我が家に帰ることが出来た。

天皇陛下の御為、皇国の御為といひながら、数えて七年、満五年四月奉公してきた。出征する時は大勢の人に見送られ、帰って来る時は一人の出迎えもない。隠れて帰ってきた。本当に恥ずかしかった。

百八十度の転回で金鶏勲章が悪逆非道の大罪人となった。時の内閣総理大臣東条英樹など七人が私たちの身代わりに死刑となった。

もう戦争は絶対起してはならない。豊川市民病院に精密検査のため入院して、頭部のレントゲン写真を七枚撮ってもらった。その検査の結果「額と左耳前に小銃弾ぐらいの破片がある」ことが判明した。この破片は昭和十九年七月二十一日安仁城の土産である。

死線を越えて内地送還

京都府 芦田 古雄

私は昭和十四（一九三九）年十二月一日、中支派遣岩松部隊大熊部隊大野部隊中村隊第十一中隊要員とし